

第8回国際植物病理学会議

農業影響軽減ユニット 石井 英夫

5年ごとに開催される植物病理学関係ではもっとも大きな学会が、2003年2月2日から7日まで、ニュージーランドのクライストチャーチ市で開かれ、各国から約1,300名が集まった。出張者は、作物の病害防除剤として重要なストロビルリン系薬剤に対して、最近我が国で出現した耐性菌とこれに関する研究、特に耐性菌の遺伝子診断と圃場における動態解析、ミトコンドリアDNA中での耐性(変異)型遺伝子の消長に及ぼす薬剤の影響について講演した。また、病原菌には直接作用しないにもかかわらず、植物の生体防御機能を活性化して、複数の病害の発生を持続的に抑制する全身抵抗性誘導化合物、アシベンゾラルSメチル及びDF-391の作用機構についてポスター発表した。

この学会では過去5年間の社会情勢の変化を反映して、食料の安全保障と病害防除、biosecurityと植物検疫や貿易、非標的微生物の多様性に及ぼす化学農薬の影響と生物環境に対する安全性(biosafety)、かび毒を生産するコムギ赤かび病菌のPCR(ポリメラーゼ連鎖反応)による識別、生物防除因子とも関わりがあるシュードモナス属細菌の抗生物質に自然耐性を示すフザリウム属病原菌、リンゴ黒星病菌の非病原性遺伝子単離への試みや抵抗性関連遺伝子のEST(expression-sequence tag、発現配列タグ)解析、遺伝子組換えによる各種耐病性作物の作出、マイクロアレイを用いた病原体の検出など、極めて広い研究領域にわたって興味深い発表が数多くみられた。

ポスターディスカッションやイーブニングセッションのほか、本会議期間の前後にはいくつものワークショップも開かれ、このうち菌類・植物相互作用の分子機序に関するものに参加し

た。今回の学会では、欧米に比べて普段目にするものの少ない、オセアニアの研究者達の研究成果にも多く接することが出来て、新鮮かつ有意義であった。

この時期が真夏であるはずのニュージーランドは、予想以上に涼しく快適で、人口約35万のクライストチャーチの街並みは往き来する車も少なく清潔であった。住宅地に位置した、宿泊先のモーターインから学会場まで片道15分の徒歩も楽しいものであった。短期滞在者に過ぎない見ず知らずの日本人に、庭先から「Good morning!」とか「Have a good day!」とか声をかけられれば、誰しも悪い気はしない。市の中心部には、クライストチャーチの名のとおり大きなキリスト教会があり、また「庭園の街」の名にふさわしく、ヤナギの樹ほかが立ち並ぶエイヴォン川のほとりには、緑豊かな植物園が広がっていた。

学会参加者が芝生の上で簡単な昼食をとった広場では、この国の成り立ちや歴史を象徴する、探検家キャプテン・クックやビクトリア女王の彫像も目にした。なるほど、ニュージーランドのかつての宗主国は大英帝国。でも、この国では一体、ポリネシアから渡来した先住民族マオリとその後の白人移民との関わりを、学校でどのように生徒に教えているのだろうか、ふとそのような疑問も浮かんた。外国人の就労ビザの発給により寛容なことなど、隣国オーストラリアとは政策面でかなり違いがあるらしい。そのようなことを考えながら、連日の学会で疲れた頭を休めることもできた、とても楽しく充実した出張であった。